

ロサンゼルス・タイムズ紙（11日付、A1面、A4面）

「津波で破壊された日本の町に希望の種 (Seeds of hope for tsunami-battered Japanese town) 」 「町を復興するための戦い (A quest to revive town) 」 (Julie Makinen記者)

石巻市雄勝町は、マグニチュード9の震源地に一番近い町のひとつ。高さ80フィートの津波が地域一帯を飲み込み、病院、学校、住宅の80%を破壊。全国の15890人の犠牲者のうち、雄勝町では300人が亡くなった。震災後、東北地方では、数千万トンもの残骸が片付けられ、破壊された病院の95%、学校の96%が再建され、何百マイルもの道が再整備された。しかし、復興庁の公式発表によると、22万人が未だに行き場を失ったまま避難状態にあり、漁業と食料加工業は他業種に比較して大幅に復興が遅れているという。

雄勝町には震災以降800人が戻ったが、うち70人が漁師。その中のひとりである雄勝町の漁師イトウ・ヒロミツさんは、男性の手のひらよりもサイズの大きな熊本牡蠣「ユメ・ガキ」を復興への夢の象徴と位置づけて養殖している。

震災以前は、仲介業者や漁業組合の力が強すぎて、新規参加者が新たにビジネスを始めるのが非常に困難だったが、震災後には誰もが参加しやすい雰囲気になった。イトウさんが震災以前から計画していた「海から食卓 (Sea-to-Table) 」ビジネスだが、震災後に3500万円の借入れをして、仙台の中心街にオイスターバー「Ostra De Ole (日本語で、「オシの牡蠣」)」を開業。自らが養殖した「ユメ・ガキ」を自らお客さんに奨める。震災の4年後にスタートし、現在も好調の様子。

雄勝町は津波によって、物質的には多くのものを失ったが、震災を経験したことで、新しいアイデアや、物事に取り組む新たな姿勢が生まれたという。

一方で、雄勝町は今でも多くの逆境を抱えている。同町が福島第一原発よりはるか北方にあるにも関わらず、韓国は放射能汚染を恐れて東北地方からの海産物の輸入を禁止しており、いまだに販売することができない。

イトウさんのビジネスが軌道に乗ってきたとはいえ、雄勝町が新たに生まれ変わったかどうかという点では、深い疑問が残る。雄勝町では震災後に建てられた家はたったの2軒のみ。若者たちは怖がってこの町に住みたがらないという。雄勝町の中心地には、今後15軒の家が建てられる予定だというが、現在は需要が供給を下回っている。でも、この住宅が完成する頃には、雄勝町の人口は1000人に戻っているかもしれない。

かつては、幼稚園や中学校、住宅がありながらも、今ではただの平地になってしまった場所には、新たに学校が建てられる計画があるというが、イトウさんはそんなことが実現するとは思えないという。「かつてここは町だったが、今はもう何と呼べばいいのか分からない。」とイトウさんは述べている。

(了)